

## トピック A. 小・中・高校生の比較 )))

### (1) 教科の好き嫌いと理解度、興味

国語、社会、数学(算数)、理科、英語、音楽、美術、体育、技術・家庭の9教科の中で好きな教科ベスト3は、小学生①体育(80.9%)、②理科(71.3%)、③国語(61.0%)、中学生①体育(65.1%)、②理科(52.8%)、③数学(45.4%)、高校生①体育(65.6%)、②社会(45.0%)、③国語(42.5%)であり、いずれの学校段階においても体育の人気の高さが目立つ。

いずれの教科も「好き」と答える者は小学生でもっとも多く、中学生、高校生になると減少するが、特に理科の人気の低下は著しい。小学生と中学生では2番目に人気がある理科は、高校生になると最下位になる。(図3-1)

この原因を示しているとも考えられるのが授業の理解度(図3-2)である。教科の好き嫌い同様、授業の理解度は小学生から高校生にかけて段階的に低下している。さらに、ここでも変化著しいのが理科(71.3%から27.3%に減少)である。また、勉強をしていて「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる機会は、小学生から中学生にかけて確実に減少していることも明らかである。(図3-15)

### (2) 学校外での勉強

塾、家庭教師、通信教育、塾や予備校の夏期講習といった学校外教育機関の利用率がもっとも高いのが中学生である。これらの利用率は高校生よりも小学生のほうが高いが、代わりに高校生の利用者が多いのは、学校が提供する正規の授業外の学習機会(補習授業、学校の夏期講習)である。(図3-7)

家での勉強も、高校生は中学生より学校の授業にウエイトをおいたものとなっている。高校生が家でする勉強のベスト3は①学校の宿題、②学校の授業の予習、③学校の授業の復習であるが、中学生のベスト3は①学校の宿題、②学校の授業の復習、③書店などで売っている問題集・参考書である(図3-6)。また、家では学校で使う教材を中心に勉強する者は、中学生では57.9%であるが、高校生では92.8%にのぼる。(図3-8)

### (3) 学習上の悩みと成績観

学習上の悩みは、学校段階に応じて変化する。小学生の唯一の悩みともいえるのは教科の好き嫌いであるが、これに対して中学生や高校生の悩みは数多い。中学生の特徴は、自己の能力観に関連する悩みを持つ者が多いことである。一方、高校生の悩みは、勉強すること、学習内容そのものに対する疑問にあり、能力観に関する悩みを持つ者は中学生よりも少ない。(図3-16、図3-17)

自己能力に対する否定的見解は、中学生の成績観にも現れている。「どのくらいの成績がとれたらいいか」「うんとがんばればとれる成績」に対する中学生の回答は、小学生や高校生に比べて控えめであり、自己の能力の限界を低めに設定する傾向が見える。(図3-11、図3-12)

## トピック B. 1990年との比較 )))

### (1) 好きな教科

この6年の間で、前回1位だった体育がわずかに1.3ポイントの増加しかなく61.1%で2位。これに代わって、前回2位だった図画工作が14.1ポイント増えて63.5%で1位へ。その他、家庭は順位は同じだが16.7ポイントも増加し57.7%。実技系の人気に比べ、前回も今回も国社算理は人気がない。(表1-2)

### (2) 国社算理の理解度

授業の理解度が目立った改善はない。授業を理解している割合は、国語が4.1ポイント増え67.0%、社会が2.0ポイント増え56.5%、理科が0.8ポイント増え71.3%、算数では2.1ポイント減り60.3%。各教科とも3割から4割の児童が十分にわかっていない。(表1-3)

### (3) 家庭での勉強

「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」割合が、前回の35.7%から約20ポイント増加し55.9%に。自主的・主体的学習習慣が増加傾向にある。宿題・予習・復習に関しては顕著な変化はない。(図1-9)

### (4) 塾・家庭教師・通信教育その他

学習塾は、前回の33.9%から今回の33.0%へとわずかな減少。塾のタイプ別にみると、進学塾が11.2%から8.5%、補習塾が18.5%から18.2%へと変化。家庭教師は1.9ポイント増え5.7%。通信教育は前回より6.4ポイント増え24.5%となり、今や4分の1の児童が利用。宅配教材は前回の24.9%から大きく減らし17.9%。(図1-17)

### (5) 習い事・おけいこ事

スポーツが43.5%から41.5%とわずかに減少。つづいて習字も1.9ポイント減少し29.5%へ。音楽は1.7ポイントの減少で25.3%、英語のみがわずかに上昇し(1.9ポイント)15.1%となっている。(図1-21)

### (6) 中学受験

受験する予定の児童は2.0ポイント増加し17.7%。(図1-22)

### (7) よい成績をとるために大切なこと

「家族の協力」が54.7%から70.1%へと大きく増加。今日では家族が子どもの勉強の重要な担当者になっている。(図2-4)

《1980年～1996年 教育トピック》略年表

西暦	小学校	中学校	高等学校
1980	●小・中学校指導要録の改訂方針を通告(文部省) ⇒小1・2年生は3段階評定/到達度評価を加味		
1983	●義務教育標準法等改正⇒小・中学校は1991年度までに40人学級を実現する		●学校教育法一部改正(文部省) ⇒公立高校入試の弾力化
1985	●「特別活動の実施状況調査」(文部省) ⇒日の丸・君が代の徹底を通知		
1987	●「幼稚園・小学校・中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」答申(教課審) →調和のとれた発達/個性を生かす教育/国際理解		
1988			●単位制高校教育規定施行 ⇒単位制高等学校制度の創設
1989	●小・中・高の「学習指導要領」告示(文部省) ⇒小学校1992/中学校1993/高等学校1994年施行 → { 小学校=「生活科」導入 中学校=選択教科の履修幅拡大, 習熟度別学級編成導入 高校=普通教科の科目を多様化, 社会科を「地理歴史科」「公民科」に分割 } 「新学力観」の提唱 →「自ら学ぶ意欲」「社会の変化に主体的に対応できる能力」が求められる		
1990	●新学習指導要領の移行措置開始 ⇒道徳と特別活動の全面実施		●初の大学入試センター試験実施
1991	●小・中学校で40人学級全面実施		●「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」答申(中教審) →普通科と職業科を総合した学科の新設/40人学級化
1991	●小・中学校の「指導要録」を改訂(文部省) ⇒絶対評価中心へ転換 →「知識・理解」よりも「関心・意欲・態度」を重点に置いた学習評価へ		
1992	●学校週5日制実施(幼・小・中・高) ⇒第2土曜日休み		
1993		●「新学習指導要領に基づく中学校の教育課程編成状況」公表(文部省) ⇒約9割の学校で外国語を週4時間に	●高校教育改革推進会議第4次報告(最終報告) ⇒「総合学科」創設を提言
1994	●文部省令改正⇒学校週5日制を1995年度から月2回(第2・第4土曜日休み)実施とする		●家庭科4単位必修へ ⇒男女共必修
1995	●月2回の学校週5日制実施⇒第4土曜日も休み		
1996	●小学校に英語教育導入(中教審) ●小・中・高の学校週5日制を「21世紀初頭を目標」に完全実施(中教審) →求められる能力は「生きる力」=「自ら学び、考え、主体的に判断する能力」		

凡例：⇒…事項の簡単な解説/→…要点・関連事項・具体的内容など

【参考文献】

- ◎江川致成・高橋勝・葉葉正明・望月重信編著「最新教育キーワード137」時事通信社、1995
- ◎伊ヶ崎曉生・松島栄一編「日本教育史年表」三省堂、1990
- ◎清水一彦・赤尾勝己・新井浅浩・伊藤稔・佐藤晴雄・八尾坂修著「教育データランド'96-'97—A DATABOOK OF EDUCATIONAL STATISTICS」時事通信社、1996

## トピック C. 学校週5日制、新教育課程、メディアの影響をめぐって)))

### (1) 家での勉強時間

平日は、1時間未満が32.3%、1時間台が40.5%、2時間以上が24.8%。日曜日は平日よりも減り、1時間未満が54.0%と5割を超え、1時間台が28.9%、2時間以上が16.1%。学校週5日制で休みの土曜日の勉強時間は日曜日とほぼ同じで、1時間未満が53.6%、1時間台が29.0%、2時間以上が15.8%。(図1-7)

### (2) 学習への意欲と感動

科目によって差はあるが、少なくない児童が学習の中で感動を感じていない。学習への意欲(好き)については、さらに低い。

なお、学習から感動を感じている児童や学習の内容が好きな児童は、その教科をととも好きになる。(図1-15、図1-16)

### (3) 進学塾への通塾と学習への意欲・感動

進学塾は児童の感動や意欲をそぐのか育てるのか? 答えは、学習の中で受ける感動では、社会と算数と国語で進学塾通塾者のほうが感動をしていた。学習への意欲(好き)でも、社会と算数は通塾者のほうが学習への意欲(好き)が高い。理科は感動、意欲(好き)ともに両者の差は小さかった。(図1-19)

### (4) 日常生活の中での学習——日常の中での基礎と応用

日常生活の中での学習は「読みたい本を本屋さんで探して買う(78.8%)」「家でペットや動物・植物の世話をする(70.0%)」を除いてはほぼ5割かそれ以下。あまり活発ではない。

なお、「虫を観察したり、虫取りをする」「家でペットや動物・植物の世話をする」などしている児童は、それらをしない児童よりも理科の学習への意欲(好き)や感動が高くなっている。日常生活の中での学習は、児童の教科の学習と強い相関をもっていると言える。(図1-24、表1-7)

### (5) ニューメディアの利用

「テレビゲームをする」が39.7%、「家でパソコンを使う」が10.5%、その他の項目は10%以下の利用率である。ニューメディアの利用はまだまだ少ない。(図1-25)